

通常学校に通う特別なニーズをもつ子どもの保護者の 就学・修学意識に関する研究(2)

—通常学級と特別支援学級の在籍選択に関わって—

○寺門宏倫（茨城県立つくば特別支援学校） 船橋秀彦（全障研茨城支部）

Key Word：通常学校 特別なニーズをもつ子ども 在籍学級の決定過程

1 研究の課題・目的・方法

国連の障害者権利条約でインクルーシブ教育が提唱された。インクルーシブ教育を進めるためには、現に通常学校で学んでいる障害児を含む特別なニーズをもつ子どもの在籍する学校・学級の選択に関わる実態を知る必要がある。そのような課題意識から、通常学校に通う特別なニーズをもつ子どもの在籍学級の決定過程を探るのが、本研究の目的である。本調査では、親同士のつながりで、親から親へ手渡しでアンケートを配布し 34 通が集まった。予備的調査研究として報告することとした。

2 調査方法

- (1) 調査対象：茨城県内（主に県南地域）の小中学校に通う特別なニーズ（障害など）をもつ子どもの親。
- (2) 調査期間：2011年6月から2011年12月
- (3) 調査方法：通常学校に通う障害を特定できる子どもの親に依頼し、親同士のつながりで、親から親へ手渡し、回収（郵送）した。結果有効回答数は31人だった。

3 調査結果

- (1) 在籍学年は Tab. 1 の通り。

Tab. 1 在籍学年

| 小1 | 小2 | 小3 | 小4 | 小5 | 小6 | 中1 | 中2 | 中3 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 9 | 6 | 3 | 5 | 2 | 4 | 0 | 1 | 1 |

- (2) 在籍は特別支援学級 55%，通常学級 42% だった。

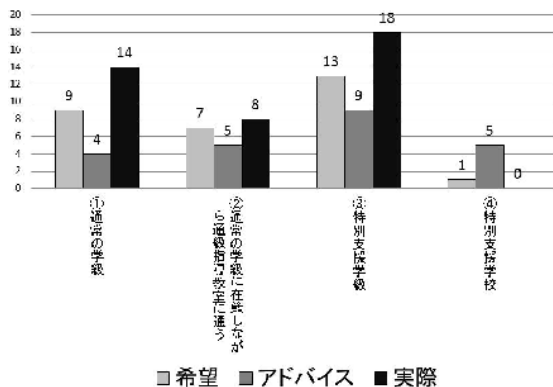
Tab. 2 在籍学級

| 通常学級 | 特別支援学級 | その他 |
|----------|----------|-----|
| 13 (42%) | 17 (55%) | 1 |

注)「その他」は、通常学級と特別支援学級の両方に○

- (3) 特別支援学校はアドバイスを受けたが選んでいない。

Fig. 1 希望・アドバイス・実際



- (4) 通常学級を選んだ9人の変化（5人は未記入）

1 は通常学級、2 は通級指導教室、3 は特別支援学級、4 は特別支援学校である。

希望1・アドバイス1・実際3：2人

希望1・アドバイス1・実際2：1人

希望1・アドバイス3・実際1：1人

・アドバイスは特に影響を与えていないと思われる。

- (5) 通級指導教室を選んだ7人の変化（2人未記入）

希望2・アドバイス2・実際2：2人

希望2・アドバイス2・実際3：1人

希望2・アドバイス3・実際2：1人

希望2・アドバイス1・実際2：1人

・アドバイスは特に影響を与えていないと思われる。

- (6) 特別支援学級を選んだ13人の変化（3人無効）

希望3・アドバイス2・実際3：1人

希望3・アドバイス3・実際3：5人

希望3・アドバイス4・実際3：3人

希望3・アドバイス4・実際2：1人

・アドバイスは特に影響を与えていないと思われる。

- (7) 特別支援学校を選んだ1人はアドバイスどおりの結果（実際）となった。

希望4・アドバイス2・実際2：1人

- (8) 就学後の在籍が変化した4名をみるとアドバイスと変更後の在籍はアドバイスより「重く」なっている。

希望1・アド1・実際1・変更3・現在3：2人

希望1・アド1・実際1・変更-・現在2：1人

希望2・アド2・実際3・変更1・現在3：1人

4 考察

- ①希望とアドバイスが同じなのは11人、希望よりアドバイスが「重い」のは6人、希望よりアドバイスが「軽い」のは3人であった。したがってアドバイスは希望と同じか重くなる傾向がある。

- ②アドバイスと実際をみると、アドバイスは独自の意味を持ちていないと思われる。

- ③アドバイスを受けて希望と実際が同じは15人（71%）、異なるには6人（29%）希望を通して多い。

- ④特別支援学校とアドバイスされた5名は全員が特別支援学校に否定的なイメージを持っていた。「教科学習をあまりしていない」3人、「どのような教育が行われているのかよく分からない」2人、「隔離されていると感じる」1人（重複ありで4人）。「他の学校には研究熱心な先生を数名存じているが、当該校にはいない感じがした。」1人。

- ⑤アドバイスを受けかつ就学後に在籍が変化した4名についてもアドバイスと実際の在籍は異なっていた。

5 おわりに

本稿は予備的調査研究である。